

## 6月例会報告

【日 時】2000年6月16日(金)19:00~21:30 筑波大学附属高校3F会議室→21:40~2:00 カリンカ

【参加者】泉優二(フリー)、江川純子、川前真一(東京 BAY フットサルクラブ)、杉村宏道(専修大学学生/F-NET)、鈴木崇正(NEC クリエイティブ)、高橋義雄(名古屋大学)、中塚義実(筑波大学附属高校)、野口良治(東京都サッカー協会)、笛木寛(大学講師)、堀美和子、松戸宏輔(東京大学文学部言語文化学科4年生)、三堀潔貴(都立北野高校)、宮崎雄司(サッカー研究会事務局/サッカーマニア編集長)、湯浅浩志(NEC)、芳川久美子(順天堂大学スポーツ健康科学スポーツマネジメント学科2年)、

【新規参加者】石田和之(東京大学大学院教育学研究科身体教育博士課程学生)、澤井和彦(東京大学大学院教育学研究科身体教育助手)、澤田尚子(JSP ジャパン・スポーツ・プロモーション)、中村彰久(東京大学大学院教育学研究科身体教育助手)

【カリンカからの参加者】島原裕司(頤草書房)、

【カリンカからの参加者】石井慎吾(筑摩書房)

注)参加者は、所属や肩書を離れた個人の責任でこの会に参加しています。括弧内の肩書きはあくまでもコミュニケーションを促進するため便宜的に書き記したものであり、参加者の立場を規定するものではありません。

何をもって「スポーツイベントの成功」とするのか

高橋義雄(名古屋大学)

<高橋義雄氏によるプレゼンテーション>

### ■問題提起■

2002年のワールドカップ開催を視野に入れた上で、次のような問題を提起する。

◎これまで日本において、国体、インターハイなどのスポーツイベントは単発的な盛り上がりは見えるものの、大会終了後、地域に残されていくものについての印象が薄い。遺産として残り、次に繋がっていく何か(ハード、ソフト、人のネットワーク等)を考える必要があるのではないか。

◎そうするためには、「運営の側からみた成功」(チケットの売れ行き、潤滑な試合運営、無事故)だけでなく、その後何かが引き継がれて定着していくための契機—「市民の側からみた成功」という視点がなくてはならないのではないか。

### ■従来のスポーツイベントの機能■

従来のスポーツイベントは、非日常的な空間で故意に「差異化と同質性」を表現する営みであった。

例:「紅組・白組」「日本・韓国」という差異化を図ることにより「紅組の一員」「日本人」という同質化が促される。参加者、観戦者はこの対立構造を受け入れ、どちらか一方に帰属することによって感動を味わうことができた。

### ■2002年の特殊性■

- (1)はじめての共同開催（三つの国または地域にまたがる可能性もある。また、韓国／北朝鮮合同チームの結成も検討されている）
- (2)実体験や共有できる体験のない競技大会（ほとんどの日本人はワールドカップに参加したことがない。未知の世界）
- (3)同時多発的な開催形式（日本のあちこちで同時に試合が行われる）
- (4)グローバルな競技大会（全世界から人が集まる）

#### ■複数の物語形成と発信■

(1)～(4)の事から、混沌としたカオティックな大会（一本軸ではなく、「多様な軸」が交錯した大会）になることが想定される。

では、誰がどのように「差異化と同質性」を表現し、世界の混沌を整理整頓してくれるのか？伝統的なメディアに頼り、一方的に作られた「物語」を受け入れるのか？それとも、市民が自らの手で多様な「物語」を形成することができるのではないかと。そして、「物語」の形成、発信の手段として、インターネット、電子メール、HPなどの\* I T（情報技術）\*を使うことが極めて有効になるのではないかと。

#### \* I T時代の情報生産の特質\*

「スピード、インタラクティブ、ダイレクト、グローバル、デファクト」→「相対化が進む&大量の情報生産」

既存のメディア情報の正しさが相対化され、それと同時に様々な人が様々な視点から語る可能性が開かれている。

#### ■ある一つの物語-岐阜県古川町の例■

岐阜県古川町：飛騨高山の少し奥に位置する小さな町。

2002年WCのキャンプ地として立候補している。ルーマニアの招致運動（ルーマニア大使館訪問、議員団によるルーマニア訪問など）を展開中。ルーマニア招致に向けての様々な活動が考えられる。

例：ユーロ 2000 の放映（町内大型ビジョン）、学校でのルーマニア語授業など。

こういう活動によって町民のルーマニアチームに対する関心が高まり、WCヨーロッパ予選への注目、あるいは、チーム訪日の際の積極的な関わりが期待できる。また、予選で敗退したとしても、練習試合に来てもらうとか、少年サッカーチームと交流するなど、後に引き継がれていく契機になりうる。

#### ■開催地の物語作家になる■

◎ベースとなるデータ、情報レベルの共有と、それをもとにした市民の物語の構成

◎既存のパワーを巻き込んだ（ネットワーク化した、リンクした）情報ネットの構成（当事者化）

◎あくまでも物語作成のためのナビゲーターの徹する構成

◎役割としての物語よりも生活者としての物語

◎物語に対する表彰や公開投票、出版化

<ディスカッション>

## ■ I T（情報技術）の可能性 ■

◎2002年の段階で、インターネットの利用率がどれくらいあるのか。現在は15~20%（全国平均）。

→利用率が低ければインターネットに過大な期待はできない。伝統的なメディアに頼ったほうが良いかもしれない。あるいは、宇都宮氏（サロン2002会員、写真家）の写真とか。

→それを誰がやるのが問題。メディアなのか、宇都宮氏という個人なのか。

◎携帯電話のインターネット機能を使う。企業もワールドカップを利用して、更なる普及やコンテンツの充実等を考えているのではないか。

→活用の方法はもっと考えられるだろう。

◎今までのインターネットの使われ方はネガティブな意見表明が多かった。

例：長野オリンピックの環境問題のインフォメーション

→反対意見は言いやすい。本当は賛成意見が多くても、それはあまり出てこない。

→既存のメディアには良い事がいっぱい書いてある。だから、裏メディアには、悪い話が出てくる。

◎テレビでワールドカップの露出度が高くなれば、インターネットでやることがあるのだろうか。同じ情報を流しても、既存のメディアには勝てない。その時にネットで流れるのは裏情報等のネガティブな話になるだろう。

◎メディアの情報に恣意性があるということはみんな分かり始めている。不信感。2002年になればもっと不信感は増えるだろう。

## ■ 大会成功を評価する基準 ■

◎開催地、都道府県、日本全体など、評価のスケールが色々あり、それぞれ違った結果が出てくる。

◎評価の軸も多様。儲かってよかった、交流が図れてよかった、韓国・北朝鮮の合同チームができて良かった、等。

◎評価軸を一本つくって提示するだけでは、もう済まない時代になっている。物語を沢山作り、市民がそのうちの一つでもチョイスできれば良いのではないか。

◎フランスやアメリカの大会でのそういう評価レポートはあったのか？

→開催国の協会の報告書は出ている。

◎長野オリンピックのその後は調査されているのか？

→報告書は出ている。また、大会終了直後の調査結果はあるが、10年後の実態はほとんど学会でも問題にされていない。

◎評価は短期的な視点で終わる。施設やボランティア活動など。しかし、もっと長期的な視点からの評価が必要。

◎最終的には個人個人の意識が成功の基準。それをどういう風にやるのか。既存のメディアなのか、そうではないのか、ということが今回の話のポイント。

◎「心の豊かさ」といった数字にならない目標をどうやって評価したらいいのだろうか？それが測れなければ、何も生まれなかった、ということになってしまうのではないか。

## ■ WC後に残るもの、残すべきもの ■

◎アメリカWCの後、たくさんのスポーツ施設が残った。

◎フランスでは、ワールドカップ後、サッカーファンが増えた。日本の場合はどうか？

◎数多くの芝生のグラウンドが残る（キャンプ地等）。

◎外国の少年サッカーチームを招いての定期的な交流試合など。

◎どういう関わり方をするかは人によって違うが、共通なのは、ホスト役という意識。オリンピックのように一都市でやるのではなく、日本全体でやるという意識がある（あるいはそういう意識が必要）。例えば、交番のおまわりさんが外国人に道を教えるとか、コンビニの店員が外国人と会話するとか、そういう一般市民の経験が将来的には遺産となっていくのではないか（国際化）。

◎古川町のルーマニア招致の話があったが、大会終了後、それがどうなっていくのか。ワールドカップは大きなお祭りでしたね、で終わってしまう可能性がある。

◎そもそも大会が面白いものになることが、その後の動機付けに必要なのではないか。

◎個人史の中で蓄積されていく思い出を地域に落とし込んでいけないだろうか。ワールドカップ記念大会を年一回定期的に開催する、等。地域のクラブや地域のサッカー協会などが受け皿になり、スポーツカレンダーとして定着させることが必要。祭りは毎年ある。そういう意味での祭り化を目指すべきだ。

→ハードより、そういうシステムを残すことの方が重要だ。

#### ■物語の作り方■

◎日本で行われる試合数、開催地、キャンプ地などの問題がある。一つの地域で一週間、三試合くらいだと、祭りをぽーんとやって終わり、という感じになるのではないか。そういう状況で物語が作られるであろうか？

→そこでの満足の仕方を提案するのがこの会の役割だ。

◎自分たちが参加する、作り上げていく、という意識を持たせなくてはいけない。今は、ワールドカップがやってくる、という感じ方がほとんど。外からやってきて、一ヶ月後にはいなくなってしまうもの。しかし、世界の人々が出会う場であるということをもっと認識する必要がある。

#### ■その他■

◎東京オリンピックでは、（強制動員ではあったが）小中学生を招待してのサッカー観戦等があった。それが一つの思い出となり、サッカーに関わるようになった人もいる。2002年にそういう話はないのか？

→長野ではあった。2002年はどうだか分からない。ただ、自治体で買ったチケットがそういうふうに使われる可能性はある。

◎そもそも2002年を（サッカーの普及していない）日本でやることに意義があるのか？ないと思う。唯一成功することがあるとすれば、それは日本代表が決勝トーナメントに進むことだろう。それが日本人をサッカーに振り向かせるきっかけになる。

◎LOC（地元開催委員会）でできることは制限されているのか？

→ロゴマークの使用などには規制があるが、イベント開催等の制限はない。

→だったら、JAWOCはそういう呼びかけをもっとするべきではないか。しかしそういう宣伝は聞こえてこない。

<中塚の感想・意見>

いろんな意見が出ておもしろかった。議論の続きは、スポーツ産業学会のワークショップ「くらしの創造」の中で行いたい。そして議論の成果は、各自治体の取り組みに反映させてもらえるよう、働きかけていきたい。議論だけ終わらせてはならない。

「今のままではあかん」というのが率直な気持ちである。伝え聞くところによると、開催自治体もキャンプ地に立候補している自治体も、そのほとんどは国体やインターハイのイメージしかなく、「単発的イベント」を「つつがなく終える」ことがイベントの“成功”であるとの認識しか為されていないようである。「つつがなく終える」ことだけをとってみても、国体やインターハイの感覚では「えらいことになる」と思うのだが、世界最大のイベントをよく理解した上で、その後のくらしづくりにどう活かすかについて考えていかないと、別の意味で「えらいことになる」。「情報の意味が読み取れない人にとって、その情報は単なるノイズでしかない」ことが高橋氏から指摘された。世界最大のイベントであっても、意味を理解しない人々にとっては「何かやっとなるなあ」というだけである。このままではワールドカップは本当に素通りしてしまう。

「2002年は早すぎた」という見方もできる。しかし、今更言ってみてもはじまらない。間違いなくやってくる2002年を、何とかしてプラスの方向に活かそうではないか。

「物語を誰がつくるか」という話が出た。ワールドカップとは何かに関する「啓蒙活動」(宇都宮さんの写真展等)が必要という話も出た。新体制となったサロン2002は、そのような活動にプロジェクトをつくって取り組めるようになっている。

「2002年FIFAワールドカップ・(啓蒙)プロジェクト」。やってみる価値はありますね。興味ある方は中塚までご一報下さい。